

クレメンス・フォン・ガレン枢機卿（1878～1946）の列福

10月9日ローマにおいて、ドイツ人クレメンス・アウグスト・フォン・ガレン枢機卿が列福される。師について教皇ヨハネ・パウロ2世は1987年5月6日に「神と人間の権利の擁護者として忘れることのできない人物」と評した。枢機卿は、なかでも国家社会主義（ナチス）のイデオロギーと体制に対する不屈の戦いで知られている。また死の文明が命の文明にとって変わろうとするこの現代においても特別の意味をもつ。と言うのは、枢機卿はあらゆる命が生きるに値するものだとして深く確信していたからである。

* * * * *

フォン・ガレン司教は1878年3月16日にミュンスター近郊のディンクラーク城で生まれ、1946年3月22日にこの同じ町で帰天した。父は第二帝国時代、中央党の議員、フェルディナンド・ヘルベルト・フォン・ガレンで、母はシュペー伯爵エリザベト、13人兄弟の下から二番目であった。スイスのフライブルグ、インスブリュック、ミュンスター（ウエストファリア）で勉強し、1904年3月28日、26歳で司祭に叙階される。

司祭としての最初の二年間は、ミュンスターの補佐司教であった叔父のマクシミリアン・ゲレオン・フォン・ガレン伯の秘書司祭として働いた。そこからベルリン・シューンベルクに移り、そこで1906年から1929年まで聖マティア教会の主任司祭を勤める（1911年から1919年の間は、聖クレメンス・マリア・ホフバウアー教会の主任司祭）。この間、神父の司牧活動の重要な部分が社会問題に割かれた。第一次大戦の結果貧困に苦しむ人々への食料配布、貧者のための募金、老人ホームの建設、破壊された教会の修築のための基金の設立など。1929年に聖ランベルティ教会の主任司祭としてミュンスターに戻る。

1933年の司教選挙

1933年9月5日、ミュンスター司教に任命される。2003年、バチカン公文書館に所蔵されている1939年までの資料が公開されてから、この司教任命に関する詳しい経緯が明らかになった。（中略）。フォン・ガレンの名は司教座聖堂の参事会が作った候補者リストの中にはあったが、聖座が参事会に送ったリストにはその名はなかった。最初に選ばれた人物が、健康上の理由で指名を受諾せず、次に選ばれた人も同じく拒否した後で、教皇ピウス11世は参事会による選出が成功するように候補者リストを拡張し、フォン・ガレンの名前を入れた。彼は満場一致で選出され、1933年10月28日、ケルンのシュルテ司教によって司教に叙階された。司教の銘として、「賞賛も気にせず、非難も恐れず *Nec laudibus nec timore*」を選んだ。後にこう説明する。「世間の賞賛や非難を気にかけて行動するべきではない。そうではなくて、神への賛美が我々の栄光であり、神への聖なる畏れに生きることが我々の常の望みになるべきです。」

国家社会主義（ナチ）の時代

フォン・ガレンはドイツだけでなく世界中で、ナチの体制に真っ向から反対してことでよく知られている。その他の司教たちも色々な機会に、個人として、あるいは集団で、ナチの考えとカトリックの信仰が両立しないことを表明した。1933年ミュンヘンでの、ミカエル・フォン・ファウルハーバー枢機卿の説教は有名である。しかし、フォン・ガレンはナチズムが内包する近代的異教のイデオロギーがいかに危険かを最も鮮明に暴き、その暴力的手段を毅然として非難した人の一人に数えられる。「自由な人間の心の最も深いところにある神殿、すなわち良心にまで入り込み人を無理やり従わせようとすることは、人間を奴隷に貶め、最もひどい奴隷状態を作り上げる。」司教として最初に出した司牧書簡において、すでにナチのイデオロギーを非難し、それが一種の宗教であることを暴いている。「(ナチズムは) 忌まわしい全体主義の新しい思想である。それは道徳よりも人種を、法よりも血を重要視し、・・・キリスト教の土台を破壊しようとする。・・・それは仮面を被った宗教である。我々が今対面しているこのキリスト教に対する攻撃は、その破壊的な暴力において、教会の歴史の中で我々が遭遇したすべての他の攻撃よりもひどいものである。」

ナチ体制の宣伝に対する予防措置として、『20世紀の神話についての研究』と呼ばれた記事を教区教報に掲載し配布させた。その記事は、人種主義を標榜する『20世紀の神話』というアルフレッド・ローゼンベルグの著作を真っ向から批判するものであった。同様に教皇ピウス11世の回勅 Mit brennender Sorge (深い憂慮をもって) の普及にも努めた。司教自身、この文書の作成に携わった。こうして、同回勅が12万部ほど刷られた。権力者からの報復措置がとられるのに時間がかからなかった。しかし同時に民衆から熱い支持が送られた。

ミュンスターのライオン

1941年7月12日、ナチ政権はカトリックの教会や団体の財産を差し押さえ、修道士たちの逮捕に踏み切ったが、この報が耳に達すると司教は即座に反応しゲシュタポと対峙した。1942年7月と8月、司教を「ミュンスターのライオン」というあだ名をつけさせるようになった三つの記念すべき説教をした。最初の説教では、無法な行動を弾劾し、正義を要求した。「我々は誰であっても、いつ何時、国家の秘密警察によって、自宅で逮捕され自由を奪われ強制収容所に送られかも知れない。自分がよい市民であると信じている者でさえ例外ではない。私は今日でもそのようなことが自分の身に起る可能性があることを知らないわけではない。・・・私はドイツ人として、誇り高い市民として、カトリック教の聖職者として、司教として、声を大にして叫ぶ。『正義を踏みにじることは許されない』と。」しかし、国家宣伝省から「ナチズムがその存在した期間最も正面から受けた最大の攻撃」と考えられたものは三つ目の説教であった。それは次のように終わっている。「我々は並ぶものがないくらいひどい気が狂ったような殺戮を目にしている。・・・そのような人々とは、我々の生命を傲慢にも踏みつけて恥じない殺人鬼とは、私は同じ国民であるとは感じない。」これらの言葉を見て、教皇ピウス12世はベルリンのコンラッド・フォン・プレISING司教に、フォン・ガレンの説教に支持を表明し、謝意を込めてこう書いている。「フォン・ガレン司教様はこの三つの説教で、ドイツのカトリック信

者とともに苦しみの道を歩む私にも、久しく感じる事のなかった慰めと満足を与えてくださいました。司教様は批判が効果を生むように見事にこのときをお選びになりました。」『ニューヨークタイムズ』でさえ、1942年6月8日の記事で、「ナチの反キリスト教的プログラムに対する最も頑強な反対者」と評している。

司教はまた説教を通じていわゆる“Aktion T7”をも強く批判した。それは高齢者と精神薄弱者たちの抹殺を計画した政策である。それに対して、司教はそれを殺人罪として刑事訴訟を始めた。そのため、一時的ではあるが、安楽死のプログラムが中止された。「あなたと私には、生産する能力をもつ間だけしか生存権が認められないのだろうか。・・もしそうならば、戦場で負傷し、仕事にも戦争にも役に立たなくなった我々の勇敢なる兵士たちは、帰還した後どうなるのだろう。もしそうならば、我々が年老いて衰弱し、もう仕事ができない状態になったら、我々全員が抹殺されてしまう道しか残されていないことになる。・・そうならば、我々のうち誰一人として、命が保証されなくなるのだ。」

正義を尊重することを要求して、司教は信仰や人種の区別なしに、迫害を受けているすべての人々を擁護した。1943年9月に発表されたドイツ司教団の司牧書簡は次のように言う。「殺人はそれ自体において悪である。たとえそれが表面的には全体の善のために行なわれているように見えても、自分を守ることの出来ない無実の精神薄弱者、不治の病に冒されている病人、長くは生きられないと思える赤ん坊、無実の人質、戦争捕虜、囚人、他の人種や外国人という理由であっても、殺人は罪である。」この文を読み、フォン・ガレンの言葉を聞いたものは誰でも、それがロシア人捕虜とユダヤ人を指していることがはっきりとわかった。

フォン・ガレンの活動を逐一監視していたナチの宣伝省と党の党首マルティン・ボアマンの胸の内は決して穏やかではなく、党の幹部の中には司教を抹殺することが必要だと考えていた者もいた。しかし、宣伝大臣ジョゼフ・ゲッペルスは、とりあえず戦争中はカトリック信者の殉教者を作るのを控え、フォン・ガレンの抹殺は「最終的勝利」の後に延ばす方がいいという意見に組した。しかし、ゲシュタポは司教の身代わりとして22人の教区司祭と7人の修道士を投獄したようで、そのうち11人が強制収容所で命を失っている。

戦後。枢機卿に

ミュンスター市も戦争の惨禍を免れなかった。同市を狙った空爆は、市街地の大部分を瓦礫にした。カテドラルや司教館も運命をともにし、司教は1944年10月ミュンスターから約20キロ離れたセンデンホストに避難した。この町は1945年3月31日にアメリカ軍に占領され、その地方一帯は最終的にはイギリス軍の占領下に置かれた。

権利と正義の尊重を叫ぶフォン・ガレンの訴えは、これで途絶えたのではなかった。イギリスの占領軍が略奪を見て見ぬふりをしたことや、身勝手な占領政策に対して、歯に衣を着せぬ非難の声をあげた。同じように、ドイツに一方的に戦争責任を負わせる主張に反駁し、ドイツ人を無差別に戦争犯罪人と見なさないように要求した。

教皇ピウス12世は1946年2月18日にフォン・ガレンを枢機卿の位に上げた。この教皇の決定はドイツ内外において熱狂的な支持を受け、師の勇敢な確固とした信仰が承認された

結果だと受け取られた。

列福の経緯

枢機卿に任命されてから間もなく、フォン・ガレンは彼の愛したミュンスターで帰天する。1946年3月28日にカテドラルに埋葬。その葬式には無数の人々が参列した。彼の死後すぐ、枢機卿への崇敬が教区の外にも広がった。ミカエル・ケラーは1956年教区での列聖の調査を開始し、ヨハネ・パウロ2世がフォン・ガレンの列福の決定を下した。

(後略)



奇跡：インドネシアの子供の治癒

アトゥンバ（チモール）で働いているシスター・Vianelde Maria Keub (SSpS)は、1991年にフォン・ガレン枢機卿の甥から枢機卿への祈りが載っているご絵をもらっていた。ヘンドリスク・ナハクという12歳の子供が虫垂炎をこじらせて非常に危険な状態に陥っていた。この病気は枢機卿を死に至らしめたものと類似のもので、医師たちはさじを投げていた。シスターと少年は、1995年1月枢機卿の取次ぎを願って祈った。すると間もなく、少年は完全に直ったのだ。

この治療に当たっていたジョイス・メネック医師は、1995年2月26日の手紙で、その治癒は医学上説明がつかないと断言している。シスター・ヴィアネルデは同じ日にそのことをブルグ・ディンクラゲの修道院に報告した。列聖省の専門家の医師たちは2004年1月29日、その治癒を説明不可能と承認した。7日後、枢機卿たちは奇跡として認知し、2004年12月20日、ヨハネ・パウロ2世は列福調査の終了を宣言した。

(Alfonso Riobó, PALABRA 501, X-05, pp.66~68)